

英語授業における英語の歌・映画の活用法

—本校66期生への授業実践を振り返って—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

須田 智之

英語授業における英語の歌・映画の活用法

—本校66期生への授業実践を振り返って—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
須田 智之

要約

筆者は2012年度より、本校の中学66期生を担任団として受け持つとともに、3年間に渡って英語授業を主担当として受け持ってきた。特に3年間の授業の中で意識的に扱ってきた教材として「英語の歌」と「映画」が挙げられる。英語を「コミュニケーションの手段として」教えること・学ぶことの重要性が叫ばれて久しいが、日本では依然として外国語として英語を学ばなければならない状況にはさほどの変化はない。英語という言葉に親しむための手段は、特にインターネットの普及した現代では多岐に渡るが、生きた英語を楽しみながら学ぶことのできる authentic な教材とて、英語の歌と映画は今後も英語授業を活性化する両輪と成り得るであろう。

キーワード：英語の歌、映画、感動する教材

1. はじめに

筆者は2012年度より、本校の中学66期生を担任団として受け持つとともに、3年間に渡って英語授業を主担当として受け持ってきた。教科書や副読本、さらには問題集など英語授業で扱うべき教材は沢山あるが、特に継続して3年間の授業の中で意識的に扱ってきた教材として「英語の歌」と「映画」が挙げられる。ここでは特に中学66期生への3年間の指導を中心に、更にほぼ同時期に授業を担当した高校生への指導も視野に入れながら、英語授業における「英語の歌」と「映画」の活用法について論じたい。

2. 英語の歌と映画

2.1 なぜ「英語の歌」と「映画」なのか

筆者は英語の授業を通して、これまでに数多くの「英語の歌」や「映画」を生徒達に紹介してきた。なぜ歌と映画なのか？ その答えは、これら2つのメディアが、特に外国語として英語を学ばなければならない日本人にとって、生きた英語を学べる authentic な教材となり得ると考えるからである。

英語の歌であれば、例えば The Beatles や Queen の楽曲は日本人学習者にとって世代を超えて親しまれ

ている定番と言えるであろう。映画に関しては、特に多くの文学作品の映画化を通じて、英語や英語圏の文化を学ぶ切り口となっているのが現状である。

2.2 英語の歌を使うメリット

『決定版！授業で使える英語の歌 20』（開隆堂）の中で、著者の一人である中嶋洋一氏は授業で英語の歌を使うメリットと効果について以下の点を挙げている。

<英語の歌を使うメリット>

1. 英語に対して親近感が生まれ、英語学習への意欲が高まる。
2. 大きな声で歌うことで、心が開放されクラスの雰囲気よくなる。
3. 歌は読み取りの自主教材となる。
4. 習っている事項の復習や、これから習う単語の予習になる。
5. 教科書には出てこない生の英語表現に触れることができる。
6. 音読練習に格好の教材となり、大きな声を出す習慣がつく。
7. 歌の中で、それぞれの国の文化が教えられる。
8. 歌詞を参考にして自己表現（作詞）につなげることができる。

<効果>

1. 歌は右脳を使うので、リズムと音と言葉が結びつき、定着しやすい。
2. 毎回歌うので、進歩する過程が自分でわかる。
3. 「歌えるようになりたい」という強い目的を持って、集団で楽しく音読練習ができる。
4. リンキングや脚韻などについても学べる。
5. 音読では暗唱できるまでくり返し練習することが大切だが、歌は肩ひじはらずに楽しく暗唱できる。

全てのメリットや効果を意識している訳ではないが、後述する選曲の3つの基準の①文法事項の導入・理解にとって、英語の歌の蓄積は有効であると考えられる。

2.3 これまでに扱ってきた英語の歌の例

以下、これまでに扱ってきた歌を列挙する。基本的には数週間をかけて複数回（平均して10回程度）歌い込む場合が多いが、中にはリスニングや歌詞の書き取りなどに焦点を当てて扱ったものも数曲ある。

<中学1年>

The Boy Falls from the Sky
Do-Re-Mi
Edelweiss
Hello, Goodbye
Stand by Me
She Loves You
Let It Be
Without You
Help
Seasons of Love
Sailing
From a Distance
Do You Hear the People Sing?
The Galaxy Express 999
I Just Call to Say I Love you
Puff, the Magic Dragon
We Are the World

<中学2年>

I Don't Want to Miss a Thing
Top of the World
I Was Born to Love You
We Will Rock You
We Are the Champions

Don't Stop Believin'
Open Arms
Zero Landmine
Bicycle Race
Somebody to Love
Where the Streets Have No Name

<中学3年>

Let It Go
Circle of Life
KISEKI
Every Breath You Take
What Makes You Beautiful
Walk On
Pride
Defying Gravity
Hotel California
The Boy Falls from the Sky

中学3年間で振り返ってみると、選曲の基準には、①文法事項の導入・理解を狙ったもの、②その年代や時々の流行、③文化・歴史的背景知識の導入を狙ったもの、に大別できる。①の具体例としては、中学1年次であれば3単現のs、現在進行形、動詞の過去形など、2年生であれば受動態、動詞の過去形、to+不定詞、動名詞、現在分詞、3年生であればSVOCの文型などの文法項目を含んだ歌を意識的に選曲するよう試みた。

②に関しては、その時々の流行に対して非常に敏感な生徒達もおり、人気歌手の流行りの歌などを取り上げることが多かった。その具体例としてはミュージカルが映画化された『レ・ミゼラブル』の民衆の歌Do You Hear the People Sing? や『アナと雪の女王』の主題歌Let It Go、人気ポップ・グループOne DirectionのWhat Makes You Beautifulなどが、その例として挙げられるだろう。いずれも、授業外でも廊下などで生徒達の歌声が聞こえてくる、というのがこれら流行歌の特徴であろう。

③の例としては（どの曲もその由来やメッセージを深く掘り下げればそうなのかも知れないが）アフリカの飢餓救済が曲の誕生のきっかけとなったWe Are the Worldやミャンマーの民主化運動の指導者であるアウンサンスーチー氏に捧げられたWalk Onなどが挙げられる。

授業では、英語の歌の導入に関しては語彙や文法事

項、あるいはその歌の由来なども含めた歌詞の理解も大切であると思うが、あくまでも「授業の初めにクラス全員で大きな声で歌う」ことによって、頭や気持ちを英語モードに切り替えることを主な目的とした。また、中1入門期から暫くの間は実技テストと称して課題曲を決め、LL 教室で生徒全員の歌を録音して発音などについてのフィードバックを行った。

2.4 英語の歌に関する成果

英語の歌によってこの文法事項が習得できた、このテストの得点が何点アップした、などという目に見える成果は残念ながら特定することはできない。しかしながら、優れた英語の歌には「自分もその歌を歌ってみたい」という気持ちにさせ、知らず知らずのうちにその歌を口ずさんでしまわせる力が備わっているのではないかと思う。そういった場合には、時として生徒達から「先生、歌の実技テストやりましょう！」という声が聞かれる。また本校の3大行事である音楽祭で英語の歌がしばしば歌われる機会があるのも、そういった英語の歌の力、あるいはそういった英語の歌の流行や価値を捉えることのできる生徒達の持つアンテナの感度の良さを示しているのだと思う。

3. 映画を英語授業に活用する

3.1 映像資料活用法の先行例

映画やDVDなどの映像資料の活用法については、本校英語科の大先輩である八宮孝夫教諭が「英語授業におけるDVDの活用—Supplementary Readersと絡めて—」として『筑波大学附属駒場論集』（2013）にまとめられておられる。実際の指導の詳細な手順や授業で使われたハンドアウトなども付されているので、中学・高校での経年指導という点からも非常に参考になる。ここでは、八宮教諭ほど筋道立てての実践を報告できないかもしれないが、ともかくまとめてみることにする。

3.2 映画を使うメリット

SCREENPLAY という映画のシナリオを日本語の対訳を付して出版しているシリーズがあるが、そのシリーズからの一冊『ミッション・インポッシブル』（1997）の冒頭のページには「映画をベースにした英語・英会話学習の特徴」が以下のキーワードでまとめられている。

・楽しく ・継続的 ・実践的 ・印象的 ・現実的

・目的別 ・段階別 ・個人的 ・文法も ・読解も
・文化も

英語の歌と同じように authentic な教材として、すなわち生きた英語を学ぶ教材として、映画は非常に優れている。特に、外国語として英語を学ばざるを得ない日本の環境において、多量のインプットを映像と音声の両方を融合させながら得られるメディアとして、非常に優れていると言える。

弱点の1つとしては、時間がかかること、すなわち1本2時間～3時間の映画ばかり授業で見せている訳にはいかないという点がまず挙げられる。この点に関しては、各学期末の特別時間割期間などに上映会を設けたり、あるいは学期中でも、忙しい学校行事などの合間に時間を作って映画を活用したりするなどの工夫が考えられる。

また、第2の難点として、キーワードにもあるように映画は「目的別・段階別・個人的」に使用されるべき教材、すなわち「映画の中から教材として活用できるシーンの焦点を絞って、それぞれに適した難易度の教材を、各自がくり返し視聴し練習する」という学習者の高い自主性が求められるという点が挙げられる。この点に関しては前述の SCREENPLAY などを活用したスクリプトや解説資料の開発が重要だと考える。

3.3 これまでに扱ってきた映画の例

ここでは、これまでに上映した映画の実例と生徒の感想を「次回再び中学3年間の指導を受け持つ際の資料」という視点から挙げる。なお、生徒の感想については「感想」（期、学年クラス、生徒名のイニシャル）という形で示した。

<中1>

『サウンド・オブ・ミュージック』

主に Do-Re-Mi や Edelweiss などの歌の指導を主な目的として場面を選定して見せた。

『スクール・オブ・ロック』

日本語字幕付きで上映した。売れないミュージシャンの主人公が小学校の教師になりすます学園コメディ。子供たちによるバンド演奏も優れており、今回は劇中の英語の歌も取り上げたい。アンドリュー・ロイド・ウェバーによって最近ミュージカル化された。こちらの英語の歌も非常に優れていると思う。

「主人公の話術に憧れました…。校長は事実を保護者に弁解するのは難しかった。だけど生徒の音楽に込められた本心は保護者の心をうった。最初は生徒がだまされてばかりのように思ったが、生徒達は本当にロックが好きで、先生を愛していたのだと思う。最後に、何事も一所懸命にやるのはすばらしい事だと思った。」(66, 1A, I)

「久しぶりに面白いというより笑える映画を見た。まさか主人公があんなおかしいことをするなんて想像もしていなくて、とても面白かった。学校の授業として英語の映画が見られるのはありがたい。ただ、日本語字幕だとどうしても読んでしまうので、できれば英語字幕がいい。」(66, 1A, S)

『ソウル・サーファー』

サメに襲われ片腕を失った主人公のベサニー・ハミルトンの伝記小説に基づく映画。家族愛や主人公が事故から立ち直って前向きに生きることなどが描かれている、非常に清々しい映画である。劇中のサウンドトラックからの曲も教材として利用が可能かもしれない。中学生のどこかで見せたい。66期の高入生にも、1学期末後に英語字幕で上映会を実施した。

「左腕を失いバランスをとるのが難しいなかであきらめずにサーフィンが続けたのはすごいと思いました。また、津波におそわれたタイに行き悲しんでいる子どもたちを勇気づけたり、自分のできる力を精一杯出したベサニー・ハミルトンに感動しました。」(66, 1A, A)

「分かった英語が結構あった。主人公がサメにやられる後と前の腕の有無は撮影のときはどのように変えたのか不思議に思う。映画としても、サメによって腕をなくしながらもあきらめることなく挑戦する感動的な話だった。」(66, 1C, U)

「彼女が腕を失ってもめげずにがんばり続けたのはすごいと思いました。片腕を失ったらサーフィンするのはすごく難しいと思うのに、努力と工夫をしてあきらめなかった彼女に勇気をもらいました。

She is amazing! I'd love to cheer her! I was moved!!」(66, 1C, H)

“I was impressed with her challenging spirit which

is never satisfied. Although she lost her arm by the shark attack, she never gave up surfing. At the end of this movie, she said that anything is possible. I hope those words are true.” (66, 1-1, Y)

<中 2>

『アポロ 13』

アポロ 13 号の窮地と地球への帰還を描いた映画。科学的な知的好奇心をくすぐることの出来る作品と言える。Graded Readers と併用することによって、テキストと映像を関連付けながら英語を学ばせることが可能である。

『フォレスト・ガンプ 一期一会』

主人公フォレスト・ガンプの数奇な人生を描いた作品。フィクションではあるが、ベトナム戦争を始めとしてアメリカの歴史の様々な出来事が描かれている。パフォーマンス・テストとして映画から幾つかのシーンを演じさせ非常に盛り上がった。

『リトル・ダンサー』

主人公ビリーがバレエの魅力に目覚めていく。思春期の少年の成長と家族愛と共に、サッチャー政権下イギリスで衰退する炭鉱労働者の悲哀を描いた作品。歴史的背景などについて、もっと掘り下げることが出来れば良かったかもしれない。

『コッホ先生と僕らの革命』

ドイツ人英語教師であると共に、サッカーをドイツに伝道したコッホ先生の物語。当時の英語の授業の様子などが興味深い。

<中 3>

『アナと雪の女王』

LLでの授業も担当していたため、毎回 15 分程度に区切って英語字幕で上映した。ストーリーもさほど難解ではないので、十分楽しめる。

『ライオンキング』

同様に LL の授業にて上映。こちらはストーリーを知らないと、英語字幕では理解に少し難点があるかもしれない。

『42』

黒人初のメジャーリーガー、ジャッキー・ロビンソン

ンの伝記映画。教科書で扱われているキング牧師の演説など、人種差別問題というテーマに絡めて上映した。スポーツという切り口からも、男子生徒たちからの評判が良かったと思う。

「ジャッキー・ロビンソンは間違いなく野球界の歴史の新たなページに名を刻んだが、リッキーの支えがこの変革に必要であったということは言うまでもない。筑駒が甲子園に出ることも間違いなく高校野球の歴史を塗り替えることになるので、『筑駒のジャッキー・ロビンソン』(?)として練習に励み、甲子園へ行きたいと思う。」(66, 3A, F)

『大統領の執事の涙』

ホワイトハウスで歴代大統領に仕えた黒人執事の物語。前述の「42」同様、人種差別問題について学ぶことが出来る。

「とても感動的な映画でした。黒人が虐げられるシーンはとても恐ろしく印象に残りました。特に、黒人の乗ったバスを爆発させるシーンは人間のやったこととは思いませんでした。面白く、興味深かったところは、主人公が歴代の大統領に仕えていたため、それらの大統領を比較しながら見ることができたところです。この映画を見て、自分もホワイトハウスで暮らしてみたいと思いました。オバマ大統領の就任は、僕もテレビで見ましたが、この主人公の人生を通して映画の中でそのシーンを見ると、とても感動的でした。」

(66, 3A, A)

「普段日本にいても考えることのない『人種差別』。幼少期に植えつけられた社会構造を覆されるのは、差別している側・される側の双方にとって辛いのだろう。また、変化の痛みを味わいたくないために変化を恐れ、暴力に走るのだろう。そんなことを考えられて良い機会だった。」(66, 3A, K)

「去年、南アフリカに行って、黒人差別のことを調べたことがあり、興味のあるテーマだった。『息子は犯罪者ではなくヒーローだったのだ』というセリフがとても印象に残った。オバマさんが大統領になった時は、あまりそれが意味することを理解していなかったけれど、今考えるととてもすごいことなのだと感じた。」

(66, 3A, I)

『ロミオとジュリエット』

悲劇のラブ・ストーリーの原型とも言うべきシェイクスピアの戯曲の映画(ゼフィレリ監督版)。八宮教諭の実践を参考に、『Romeo & Juliet (Oxford University Press)』と共に視聴し、バルコニーや墓地のシーンなどを生徒たちに演じさせた。ディカプリオ主演のものとの対比などを試みても面白いかもしれない。

<高校1年生 62期、66期>

『カンフー・パンダ』

旧課程の Oral Communication I (現行科目では英語表現 I) で、映画を LL にて英語字幕で視聴させると共に、名台詞を含むシーンを幾つか選んで生徒たちに実演させた。以前本校に勤務されていた平原麻子教諭が、筆者の行った指導手順の発展形について「アウトプットにつながるインプット」として『英語教育 6月号』(2012)に紹介をしている。以下は筆者が行った acrostic を作るという授業である生徒の作品例で、Youth というお題(テーマ)と映画の内容を見事に結び付けた作品で感心させられる。

YOUTH

“Yesterday is a history.”

Oogway said that word.

Unfortunately.

That is true.

How can I go back to yesterday?

(62, 1-1, K)

『ベイマックス』

本校の国際交流 Day という行事で授業日程が分断されてしまう時期に、高1の Communication English I の授業内に2回に分けて英語字幕で視聴した。主題歌の Story も同時期に授業で扱うとともに、国際交流 Day で来校した台中一中の生徒との特別授業でも一緒に歌った。

『ミッション・ブルー』

海洋生物学者 Sylvia A. Earle 博士による、Netflix 限定公開のドキュメンタリー映画。海洋探査の研究分野における第一人者の博士が、長年に渡る研究の調査結果から「海の保全」を我々に訴えかける。

「いのちの母である海が人間の異常なまでの乱獲によって魚の数を大きく減らしているのは統計によって明

らかなことだから対策をしていかないといけないと感じました。日本人は一年間に大量のマグロを食べ、クロマグロは以前の 10%以下までに減ったと言われていますが、今でも規制しようという動きは日本国内では見うけられません。今動かずにいつ動くのでしょうか…。」(66, 1-3, L)

“This movie is worth watching, I think. First, I can hear what is said in the movie, not too difficult nor easy. Second, I can understand the difficulties to manage to do both research and life. They often become incompatible, and I wonder if I could do both if I were her. The destruction of the ocean is also astonishing. I want to see more next time.” (66, 1-3, I)

『スタンド・バイ・ミー』

Pearson Longman の *The Body* と併せて映画を視聴した。*The Body* は夏休みの課題として読ませた。主人公の少年達や彼らの行った冒険に対する共感を持つ点がこの教材の魅力であるので、そういった点を Discussion するなどすると、より教材を掘り下げることが出来たかもしれない。小説と映画の結末の差異などについて考えるのも面白いかもしれない。

『ラッシュ／プライドと友情』

実話に基づく 2 人の F1 レーサーのライバル関係を描いた作品。手に汗握るカー・チェイスを堪能できると同時に 2 人の主人公のドイツ語なまりの英語やイギリス英語も楽しめる。特別時間割期間の映画上映会は学年全員が参加するという訳にはいかないが、参加者人数が多かったことから非常に好評であったと思う。

『スター・ウォーズ 新たなる希望』

現在エピソード 7 が公開中である。シリーズの原点としてエピソード 4 を見ておくことに意義があると考え、ストーリーを英語で学べるようにと『CD 付 スター・ウォーズの英語[エピソード 4 新たなる希望]』(安河内哲也著)とともに映画を視聴している。映画を見終わった後には Joseph Campbell の *The Power of Myth* から、スター・ウォーズに見られる神話の影響について学んでいく計画である。

“I have never seen “Star Wars” series before but it was very interesting and exciting. However, the

battle between Obi-one and Vader was not thrilling and I was a little disappointed. Still, the story was great, and I want to see episodes V and VI, too in the English lessons.” (66, 1-4, K)

<高校 2 年生 62 期、63 期、65 期>

『グレート・ディベーターズ 栄光の教室』

アメリカの黒人大学ディベート・チームの活躍を描いた実話に基づく作品。高校 2 年生の TT 授業を受け持つ際に英語ディベートを取り上げるが、その指導の際に見せることにしている。劇中には黒人がリンチを受けるという凄惨な場面などもあり人種差別の非道さに改めて衝撃を受ける。最後に描かれているハーバード大との論戦のシーンは圧巻である。

“This movie gave me a great inspiration and I thoroughly celebrate the victory of Willy College. On the other hand, however, I felt that the debate match between Harvard and Willy turned out to be unfair to Harvard students. When the student from Willy talked about his own experience seeing a dead body of a black man in Texas lynched by white men, almost everybody in the auditorium should have felt pity for him. I am not trying to say that Willy College won the debate match just because they are black people, but it would be safe to say that debate matches of this sort depend on the students’ ethnic and educational backgrounds. (65, 2-4, S)

『レ・ミゼラブル』

近年、多くのミュージカルが映画化されているが、その代表作と言えるであろう。Do You Hear the People Sing? を初めとして名曲が多い。実際の授業ではミュージカルのコンサート映像から数曲を紹介するのに留めたが、冬休みなど映画館へ足を運ぶことを奨励した。実際に多くの生徒がこの映画を見に行ったようである。高校 2 年生の TT 授業で 3 学期の授業の回数が非常に少なかったため、劇中からの数曲を選んで練習をさせ、パフォーマンス・テストとして歌わせた。最後に全員の合唱で締め括るクラスもあった。

『今を生きる』

上映会を開催するとともに冬休み課題として視聴を勧めた。アメリカの寄宿舎学校を舞台に繰り広げられる教師と生徒たちの心の交流を描いた学園物語。英語

教師キーティングの指導に感化され、生徒たちは詩や文学、演劇などに興味を抱いていくが…。劇中にもあるように、自作や自分の好きな詩や文学作品等についてのプレゼンテーションを学期末に実施すると共にその原稿を冊子にまとめる予定である。

3.4 その他、映画を題材にした発展的指導

これまでに列挙した生徒による感想を概観すると、その時々成長段階に応じて、それぞれの映画に対して生徒達が様々な感想を持ってくれたことが改めて分かった。特に、日常生活では得られないような未知の分野に対する興味関心や感動を素直に表現してくれたものが多く嬉しく思う。また、感想文を書く際の使用言語が徐々に日本語から英語へと変化していることから、長期的な視野に立って英語習得の成果を観察することが可能である。

ここに挙げた感想文の他には、映画を題材にした発展的指導、すなわち発表活動として、①学期末のパフォーマンス・テストで映画のシーンを演じる、②映画についての紹介スピーチをさせる、等が挙げられる。①の映画のシーンを演じるパフォーマンス・テストについては、これまで『カンフー・パンダ』、『フォレスト・ガンプ』、『ロミオとジュリエット』等の作品で実施してきた。映画の中の名台詞や感動的なシーンを気持ちを入れて演じようとするのは、英語が持つ「ことば」本来の意味や働きを理解するという点において大変有意義であると思う。②映画についての紹介スピーチも、生徒同士がお互いに情報・意見を共有する機会として非常に盛り上がった。その作品例を巻末に示す(資料1)。以上、これまでに扱ってきた映画の活用法についての概要を述べてきたが、発表活動については、何より生徒同士が「英語での発表を楽しむことができる」ということが、その醍醐味であると思う。

4. おわりに

高校時代の筆者にも、英語の歌を紹介してくれた教師がいた。高校1年次の授業で、John Lennon の Imagine をギターで弾き語りで歌ってくれたその先生姿を今でも鮮明に記憶している。

英語の歌や映画を授業に用いているという教師は沢山おり、特段この論集に書くほど特別な実践では無いかもしれない。しかし、大切なことは、生徒たちが興味関心を持って、楽しみながら英語の学習に臨むことであり、ここに挙げた実践においてその一端が垣間見

られたと思う。

今後は更に、小説や詩、テレビ・ドラマや YouTube などでのインターネット動画など、歌や映画に隣接するメディアの活用も視野に入れながら、英語授業の実践を充実させていきたい。

【参考文献】

1. 井上謙一ほか(2001)『決定版！授業で使える英語の歌20』開隆堂
2. フォーイン クリエイティブ プロダクツ社編(1997)『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ No. 78 ミッション・インポッシブル』
3. 八宮孝夫(2013)『筑波大学附属駒場論集紀要』pp.157-167
4. 平原麻子(2012)「アウトプットにつながるインプット」『英語教育』6月号, pp.29-31, 大修館書店
5. 安河内哲也(2015)『CD付 スター・ウォーズの英語[エピソード4 新たなる希望]』, KADOKAWA
6. Campbell, Joseph (1988) *The Power of Myth with Bill Moyers* ANCHOR BOOKS

Inside Out

K. K.

Hello Everyone. Today, I'm going to introduce a movie called, "Inside Out". Have you ever heard about this movie? It is a movie about our minds. The characters are the five emotions that are in our minds, which are, Joy, Sadness, Anger, Disgust, and Fear. One of them, Joy, wanted to make the human as happy as ever. But, Sadness was in her way, since she always makes the human sad. Have you ever thought of how good it would be if there were no sadness? You don't need to have that very bad feeling even if your pet died, or even if you got a bad score at the examination, right? But after facing trouble, Joy realized the value of Sadness, and decided to be on good terms with her. How sadness is useful for us? To check the answer, watch the movie!

In Japanese, this movie is called, "*Insaïdo Heddo*". I think this is a horrible translation. If the title only shows that it is a movie about the things inside our head, the title should be "Inside the head". But it is not. The title is "Inside Out". Inside out means that it's having the inner surface turned out. The author put a very important and a very profound meaning into this word. It means that our emotion, like joy and sadness, are just like the two sides of the same coin, and they could be easily turned out. It is difficult to understand this, but it's another theme of this movie. I think you can feel about this if you watch the movie.

This movie is basically for kids, but it's also for grownups too. All I can say now, that it is a very very good movie. Anyone who has even a little bit of interest towards this movie, I will strongly recommend you to watch it. In English, please. Thank you for listening.